

後
記

江苏工业学院图书馆
藏书章

藏
集

卷
九

鏡花全集 卷九 第九回配本（全二十九卷）

定價二千二百圓

昭和十七年三月三十日 第一刷發行
昭和四十九年七月二日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 株式會社 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉 名 月

目次

千鳥川	(明治三十七年五月)……………	一
國外軍事通信員	(明治三十七年七月)……………	一五
柳小島	(明治三十七年九月)……………	三
わか紫	(明治三十八年一月)……………	八七
銀短冊	(明治三十八年四月)……………	一七九
瓊瑤品	(明治三十八年六月)……………	二五五
少年行	(明治三十八年七月)……………	三四二
胡蝶之曲	(明治三十八年十月)……………	三八一

女	客	(明治三十八年十一月).....	四六七
惡	獸	篇 (明治三十八年十二月).....	四八九
海	異	記 (明治三十九年一月).....	五七七
月	夜遊	女 (明治三十九年一月).....	六三二

千
鳥
川

上

「おかみさん。心中のあつた處ださうだね。何だか氣の毒らしくつて、好い景色だとも言へないやうな氣がするな。」

夕陽にかざした小手を拂つて、客なる學生は差置いた猪口を取上げた。

「嘘でございますよ、あなた、案内者をお連れなさいましたか。」

「可哀相に、御覽の通りの棕鳥だけれども、汽車といふ重寶なもののあるお庇には、今はじめての參詣ではない。」

店頭へ床几を据ゑた。土間に掘立の柱につかまつて居る女房、仰山に胸を反らして、
「あら、まあ、飛だことをおつしやる。然うではございませんけれど、大方案内者が、そんなことを申上げたんでせうと思ひます。」

「其では間違つて居るのかい。」

「まるで、貴下、嘘なんでございますもの。」

「でも何だぜ、新聞にさへ委しく出て、一時大騒ぎをやつたんだぜ。」

「其は貴下、心中のあつたのは眞個でございませうけれど、何も彼の鱗岩からではございませぬ。

此のさきの千鳥川の川下へ身を投げたのでございませうがね。それぢや些とも引立ちませんから、あゝやつて此の土地へさへ入らつしやれば、直ぐ誰方でも目につきます、御覽なさいまし、彼の通り、」

立つて居て伸上る、女房の目には望むべく、胡坐で居て、俯向く學生の目には瞰すべく、島山の根をさら／＼と嚙んで、恰も霜柱の崩れるやうな、浪打際を稍離れた邊、五尺海面を抜いて五十疊敷ばかりの一座の岩、一脈、一秒に波が被つて、たら／＼と其の上を走るが、折からの夕焼に金を溶かして流せる如く、又、右より、左より、前より、後より、悠然と然も隙なく、靜かに然も強く、和かに然も揺れて、乗上り、躍越し、引返し、溢れかゝり、ざつと引いてやがて打ち打ち打寄する、水と水と相合ふ處々、水銀を投げて碎くやう、然も周圍は、綠青の濃き慎重雄大な色を湛へて、恰も一條の青龍有り、其の岩の根に棲んで、其の鱗を一個々々、潮に呼吸つく毎に、海はたゞ彼處ばかり常に大動揺をするが如くである。

「彼でございませうから、貴下、龍の鱗岩と申しますと、津々浦々まで聞えて居りますので、評判の立ち好いやうに、新聞で拵へたのでございませうとさ。」

「然うか、成程、」と、他に思ふことのあるらしい、生返事を爲ながら、今なほ瞻つて居た鱗岩から目を返して、

「ぢやあ其の、」

一口飲み、

「川下だね、抱合つて入つたのは。而して千鳥川といへば此處へ来る路に、川つゞき、山の下まで早船が出る、彼處だらう。」

「然やうでございますよ。」

「はてな、」

學生は膝で割つてはさむやうにして居る、膳の上の箸を取つたが、謂ふことに實が入つたか、其のまゝ置き、

「千鳥川と聞くと恐ろしく寒くつて凄さうだが、いや一向なものぢやないか。匍匐になつたつて、急に沈みさうにも見えないぜ。」

「貴下、潮がさしひきをいたしますよ。其に丁ど心中したのは引潮時でございましたから、するすると海へ奪られましてね、死骸は、何でございます、此の沖で上りました。」

學生は頬に手を當て、

「はあ、潮のさしひき、いや、大うかつ。薩張其處へ氣が着かなかつた、潮のさしひき。……お、然う云や、杯の引潮時だ。」

と手酌で注ぎ足して、呵々と笑つた、怪しからず、いい機嫌。

女房は餘り機嫌がよくない。何故なら、書生客と、土間を僅ばかり隔てた、此の岩端の掛茶屋の其の一番海に臨んだ端の床几に、貴なる美しい令嬢一人、女中が二人ついたのが休んで居るから。

利害失得、之に酒客を置くのは、彼處の茶代に關する、と思ふので。

下

「お銚子はいかゞでございますね。」

其にもせよ、取合はずに居ては、何時まで飲んで居るか知れないので、女房が自分に、お銚子の區切をつけに來たのであつた。

「未だある、女房さん、お酌には及ばないが、まあ話し給へ。えゝと、慙う斬つたり、はつたり、人の生命にかゝはるやうなことは、都會にはいくらもあるが、こんな邊鄙だから噫其の時は騒いだらう。」

「そりや、随分騒ぎました、」

「どんな風だつた、おかみさん、見たか、」

「さあ、見ましたとも、死んで上りました時は存じませんが、心中をします日の晩方、二人づれでお参詣をして、その時私どもへ一寸休んだのでございますもの、」

學生は乗出して、

「様子は？些ともそんな様子は無かつたかね、」

「何ですか、貴方、榮螺でも召食りませんかなんて申しまして、あゝ、あゝッたッ切、上げて可いんだか、悪いんだか分りません位、二人とも中で返事をして、上の空でも居るやうでしたッけ。少い同士夢中なでせう。それに、女の方は、テキハキものを言ひ得ませんし、大方、極が悪いんだらうと思つて居ましたがね、なあに、男は尋常の方なんださうですけれど、女と來た日にや、良い家のお嬢さんで、立派な學校の生徒さんだといふのに、飛だ浮氣もんださうです、行きがけの道づれにされたのでございます、而して些とも容色が好かないんだから厭ぢやありませんかね。」

「だツて、欺されたと言ふわけでもなからう。思合つた中なればこそ、心中もしたし、又死骸さへ女の扱帶で結合つて居たといふぜ。」

「其が皆、こましやくれた女のさし金でございます。いゝえ、皆知つて居ります。つい此のさきの、増屋といふ旅籠屋のお客で、四五日逗留をするといふ話だつたのが、學校の都合で、急に終汽車で東京へ歸らなければならぬと言出しましたさうで、其がもう日が暮れてからでございしましたものですから、番頭が提灯をつけて、千鳥川筋を村はづれの立場まで見送りました。其のあとで、又あとへ引返して、川下から這入りました様ですが、其の番頭なぞも然ういひます、旦那の方は内氣な優しい方でしたつて。」

だから、御覽なさい、はじめは、あれ彼處に、」

と、女房は山の方を見返つた。白布を引いて磯形に上へ並んで、虹の如く、岩の狭間に途切切の故道を横切つて、遙に一條の濃き煙、胡粉を以て描けるやう、そよとも靡かず。其の邊から黄昏れて、岩間々々の波暗く、榮螺の背に暮れかゝつて膳の上がうら淋しい。

「あの海草を焚いて居ります、彼處等が、合葬場で、死骸は假埋になりました。」

後で知れたのでございますが、なか／＼貴下、其の女の家は、急に名の知れませんやうな身分ではないのですけれど、最う親達も、家の恥と、打棄つて置くのでございませう。

男の方は御親類の方が、直ぐに駈けつけてお見えになりまして、早速掘起して立派にお引取りなさいました。」

學生は眉をあげて、

「女の死骸は、」

「其のまゝでございます。身を結へつけた上に、未だ、黒髪の水にほぐれたのが、恐い、男の肩をびつたりと巻いて、女の方からしつかり抱ついて死んで居たと云ふんでございますよ。そんなしだらで男をそゝのかして、慾の深い、貴下、何うぞ死骸は一所に葬つてくだされましと、お役人宛に女の手で遺言がしてあつたんださうでございます。憎いぢやございませんか。」

其の遺書が、村役場に大事に了つてあつたのを、男の方の御親類に見せましたものですから、叔父御だといひましたね、書記官とかを遊ばす、御身分のある方が、憎い阿魔だ、と齒がみを遊ばして、引裂いてお棄てなさいましたさうでございます。可氣味ぢやございませんか。

あとで胸も乳も露出のまゝで、阿魔つ兒は一人ぼっち、舊の投埋、ほんとに唾でも引かけてお遣りなされば可かつたと、其時もお供をした増屋の御主人、番頭さんも然う申します。」

「ま、ま、待て。」

學生は、女房の行きかけたのを、猪口の雫を切りざまに、斜めに手を振つて遮つた。

「待て、氣の毒千萬。そんな分らず家が揃つて居るから、若木の枝を撓め枯らすやうなことになるのだ。可、親類の者は、身最良や、身内の可愛さに目も眩まう。但、此處へ遊びに来るもの

が、自然おかみさん、お前の話などを聞いたら、嘸そ皆可哀相だといふだらう。彼の鱗岩を叩く者もあらうし、舊道を通がかりには、路傍の草なりと、手向ける人が澤山だらうね。」

「否、貴下、誰がそんな間違つた、第一、身を投げたのは彼の岩からではないと申しますと、何だ馬鹿々々しい、とおつしやいます。心得違ひなどといふ方もあり、業曝などといふ方もございますね。つい此の間も、其の女の、學校ともだちの、皆様、蝦茶のお傍を召したお嬢さんがお三方で、島遊びにおいでなさいましてね、其の話が出ますと、私たちはもう舊から交際は爲なかつたとおつしやいましてね。抱合つて死ぬなんて何といふ醜態だらう、學校の名なんか出されて、ほんとうに友達の外聞だ、聞くのも厭と、耳をおさへるやら、目をかくすやら、貴下、口を袖で塞ぐやら、ほんとうに學問を遊ばした方は豪うございますよ。それから貴下、黙つて居れば可うございましたけれども、ついお話の序に、心中が此店で休んで参りました、と申しますと、え、まあ汚けらしい、同一家に休んだといつて、袖を拂つたり、裾を振つたり、鶴龜々々をして、さつさとお歸りなすつたので、私も氣が付きましたものでございますから、遅滞ながら心中の休んだ床凡に、鹽をバラ／＼とふりましてございます、もう些ともおきつかひはないのでございます。」

「いや、戲談ぢやない。」

と學生は擲つ如く、びたりと杯を俯向けに膳に伏せ、

「汚らはしいも凄じい！お茶ツぴいめら。尤もな、蝦茶なんか穿いてた日にや、身を投げたつて、龍宮で門前拂た。」

と激しく聲高にいつた……我ながら、別座の客に氣がさしたか、學生がフト後を見ると、岩端に立つて、小形の雙眼鏡を取りながら、球を袖に伏せて、すらりと背姿でインで居た、世にも麗かな高髻の、頸脚の雪のやうなのが、思はずもの思ふ風情で、振返つて、ト顔を見合せた。

二人の女中は、二人して、手に手に、しとやかに林檎を剥いて居たが、菓子皿を挟んで、向き合つて、緋の毛氈の上に正しく坐したまゝ、齊しく莞爾した、が、又伏目になる。

令嬢はそれなり雙眼鏡を其の涼い目にあてて、山手の方へ向をかへたが、一度迂らしたやうに外して、やがて片手を柱にかけた。羅の袖は優しく、時に件の煙とともに、やさしく晚風にそよいだのである。

意氣昂然として、

「そんな徒は簀巻にして沈めたつて活返るのだから論外だが、可哀相に、死んだものを、くさしかける奴があるか。」

善にせよ、惡にせよ、まあ、聞け。死ぬといふはよくせきだぜ。たとひ、ふしだらにもせよ、又身性の悪いものにもせよ、懺悔に消えるときへいふものを、生きて居られないと覺悟をすりや、

罪も報も其迄だ。

譬ひどんなことがあつたにしろ、身を棄てたら許すべきぢやないか。

現在、命を捧げたものを、其の情を酌まないで、親類とやらの奴も然うだ。對手の女をこき下すのは、男の恥を曝すんだぜ。死骸になつても黒髪で抱緊めて居たあはれなものが、引放されて一人あの路傍へ投埋めにされたら、何んな心持がすると思ふ。

一體貴様たちのいひやうが宜くない。女は不身持だの、死んだ場處が違つてるの、容色がよくないのと散々に話すから、聞く奴等も鼻のさきで扱ふんだ。

嘘でもない、追善菩提のため、飽まで譽めろ、思ふさま庇つて話せ。

場處も如何にも、鱗岩で、然も月夜だつたといへ。一度お顔を見上げたものは、私どもはじめ、思出しては泣きますと何故いつてやらない。

鹽をふつたやうな了簡方だから、貴様の此の店も繁昌しない。一生榮螺を焚いて終りたくなかつたら、お二方のお休み遊ばした處だといつて、道行茶屋といふ看板でも出して見ろ、あの鱗岩を築山にして、此の海を庭にする位、三階建に出世をすら、馬鹿な奴だ。

何うせ、くさしついでだと思つて、第一女振が好くないなぞといふことがあるものか。先づ其の容色から譽め立てろ、つひぞ見た事のないやうな美しいお姫様でございましたと、」

「ほゝほゝ、」

女房は餘りのことに大笑をして、然も輕蔑したやうに、

「はあ、可うございますから、お靜に行らつしやいまし。譽めませうとも、男の方は、貴下をそツくり、」

と馬鹿にする。

學生は、おつと見て、

「可し、そして女の方は、」

と片膝立てて、屹と振向き、

「彼處においで、あの御婦人を其まゝ、」

「貴下滅相な、途方もない、」

それだからいはいぬことか、醉漢と、女房は蒼くなつて、此の罰に茶店が崖から落ちるだらうと思ふばかり蒼くなつた。

學生は自若として、しかし白面に醉ならず、紅を潮して、

「失禮……失禮ながら、」

「何うぞ、あの、私でよろしくば、」と優しく微笑んで見かへりながら、呆れて茫然とした腰元に、